

校長先生の部屋だより

哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

今日は終業式です。昼休みの時間が短く、その分を大掃除に充てます。それでも1年生男子1名と、後から3年生男子2名が訪ねてきました。

—今日はどんな問いを持ってきたの？

A：もし、脚が取れてしまったら、残りの身体が自分だと思うんです。さらに首から下がなくなってしまうと、もし何らかの仕方で生きていたとすれば、首から上が自分だと思うんです。それでも脳だけになってしまっても生きていたら、それが自分なんですか？

そこに3年生2人が入室。1年生のAの話をもじって聞く。

B：全部そろって自分じゃないんですか。

—でもA君は脚が取れても自分だ、と言っている。それをどんどんエスカレートさせて、最後は脳だけになったらそれを自分と呼べるかを問題にしているみたいだ。

C：じゃあ俺とB君の脳を入れ替えたら人格が入れ替わる？

—それは脳が人格（の物質的実体）だということが前提になっているね。それじゃあ、こう考えてみたらどうなるだろう。最近記憶力が悪くなってきた。技術が発展してもその部分を機械（AI）で補うことができたとしたら？判断力が鈍ってきたとして、それを補う技術ができたとしたらどうだろう。どんどん機械化して最後に残るのはどの部分だろう。ああ、残念、時間です。

（感想）

人格を何らかの機能に見る以上、それは機械で代理可能ということになりそうです。人間（人格）とは機能に還元できるものなのでしょうか。ここが分からない・・・